



## 明治のサーカス芸人は なぜロシアに消えたのか

大島幹雄著

おおしまみきお 53年生まれ。  
サーカスプロモーター。著書に  
「満州浪漫―長谷川瀧が見た夢」  
など。

評 長勢了治

翻訳家

古ぼけた3葉の写真、そこに写っていたのは革命前後の激動するロシアに生きた日本人のサーカス芸人たちだった。

この写真の謎を解くべく、著者の追跡調査が始まる。1篇のミステリー小説のようにも読めるが、実は25年にわたる地道な調査に基づいたドキュメンタリーであり、随所にサーカス・プロモーターたる著者ならではの識見が光っている。

分かっているのはイシヤマ、タカシマ、シマダというカタカナ名だけだった。手がかりを求める著者の追跡は、日本とロシア両国の書籍、雑誌、新聞はもちろん、ポスター、辻ビラにまで及ぶ。

実は日本が開国した幕末か

## 革命期駆け抜けた技芸

ら、早くも多くの軽業師や曲芸師が海外に渡っていた。しかも、日本の芸人のレベルは、欧米を凌駕していたというのだ。芸人はロシアへも敦賀港からウラジオストクヘ渡り、各地で公演したのである。

革命前のロシアで最も有名な日本人一座は「ヤマダサーカス」だった。座長の山田亀吉が率いて1908年(明治41年)にウラジオストクヘ渡り、「ハラキリショー」でロシア人のエキゾチシズムを刺激して「日本の奇跡」との名声を得たという。



著者はついに、このヤマダサーカス一座で第1次大戦後もソ連(当時)に残る道を選んだ芸人の中に、名前が特定できる空中ブランコ乗りと、ジャグラー(投げ物曲芸師)、バランスアクロバット芸人の3人がいたことを突き止める。ただ、惜しむらくは、漢字名まで判明しなかったことだ。

革命後の混乱の中、3人は自らの芸だけを頼りに、異国で生き、ついに祖国へ還ることはなかった。

中でも朝鮮人のバランスアクロバット芸人は、肅清の嵐に巻き込まれて刑死する不幸な運命をたどる。その後、残された家族は「究極のバランス」と絶賛される神技を編み出し、父の無念を晴らした。芸は見事に受け継がれたのである。

(祥伝社 1680円)